

錦織監督

映画の現場から



●○○● 38

17日「渾身」上映の意義

日本の映画作りは東京に集中している。諸外国は日本の真逆。日本より人口の少ない地方都市でも映画会社があり、その地に即した映画が製作されている。それだけ映画が生活の一部になっていると言ってしまうとそれまでだが、日本が何もかも一極集中しているのには違和感を覚える。だから映画「渾身」が「地方発信映画」と東京で言われるのにも違和感を覚える。

映画の力が失われたことと、地方から映画館が消えたことは大いに関係があると思う。娯楽が多様化した、との意見もあるが、欧米や中国、インドなど映画大国の映画館の推移から必ずしも当てはまるとは言い難い。

日本の映画が社会に与える影響力があることすら忘れ去られてしまっている原因は他にある。観光立国を掲げるわが国は、東京文化を含め多くの地域性や環境を残すことこそ未来に生き

地方の豊かさ気付く契機に

る道だと思うが、情報が東京発信なので島根のカルチャーもだんだん東京化しているような気がする。個性が失われたら元も子もないはずなのに。

ヨーロッパでは、何とか若いうちに成功して、年を取ったら空気が水がきれいで環境の良いところで余生を過ごし、一生を終える、といった人生観を持つ人が多い。ライフスタイルや死

生観は書物や映画から吸収するのも日常。島根のとある進学校の高校生が、早く自分の地元にもエレベーターのあるビルが建つように発展してほしい、と発言したことに思わずハッとしたりを思い出した。高層ビルの技術などは広大な土地があれば無用であり、マンシ

ョン生活が必ずしもかっこいい生活ではないということとを、地方の多くの若者に

気付いてほしい。

先日震災後初めて「渾身」キャンペーンで福島、山形、宮城を訪れた。取材時、涙ながらに隠岐の映画を語ってくれたアナウンサーの口から、地域があるからこそ幸せに生きていけることに気づかされたという本音を聞くことができた。家も工場も全て流された女川の方は、震災で避難している全ての人に「渾身」を見せたいと声を詰まらせ、手を握ってくださいました。

社会が成熟していく中で、真の発展は精神的豊かさともにあるべきだとあらためて思われる。隠岐の暮らしを筆頭に、島根をはじめとする自然豊かな地方こそ最先端であると確信しているからこそ、隠岐の映画を作らせていただきたい。地方を大事にする映画「渾身」の全国初の上映が17日に島根県民会館で行われることは意義深い。映画業界としては異例なことではあるが、島根の映画文化を支えてきた「しまね映画祭」からのスタートはとても象徴的だ。日本の映画も価値観も大いなる転換期を迎えている。

(錦織良成・映画監督)

第2、4金曜掲載



映画「渾身」のワンシーン